赤本「鼠の嫁入」

――子ども絵本に託された想い――

森下みさ子

日本における子ども絵本は「鼠」に始まる。

京都中心に営まれていた出版業が江戸に移り始めた、江戸は延宝（一六七四～）の頃、絵入浄瑠璃本の一種として江戸で生まれた「金平本」[*1]や、京都に誕生した贅沢な趣向の「行成表紙本」[*2]等が下地となって、ゆっくりと子ども向け絵本の誕生が用意されていた。やがて江戸で産声をあげる「赤小本」がそれにあたる。明暦の大火（一六五七）以後すたれてゆく「金平本」や、高価さ故に広く子ども等の手に渡らずに果ててしまう「行成表紙本」に比べて、丹表紙をあしらった、小型の（縦四寸一分八厘、横二寸八分八厘、12・4×8・5㎝）赤小本は、手頃な値段で子ども等に渡り、愛され、後に子ども絵本の様式を確立する「赤本」の確かな先駆けとなった。

このような、子ども絵本の胎生及び誕生の時期に、「鼠の嫁入」「鼠年中行事」「鼠の耕作」「たからねずみ」等、鼠が大変親しくとりあげられている。とりわけ、「鼠の嫁入」は、行成表紙本・赤小本・赤本を通してみられ、

子ども絵本のはじまりとの密接な関わりを告げている。また、それにとどまらず、やや大人向きに趣向を変えて、黒本・青本・黄表紙へと繋がっており、子ども向けの財を契機として、江戸を通じて好まれた題材であったと思われる。

私は、ここで、子ども絵本の先駆けとなった絵本「鼠の嫁入」をとりあげ、当時の人々の、子ども及び子ども絵本によせた想いに光をあててみたいと思う。

◆赤本『鼠の嫁入』

浅倉無聲氏の労による『日本小説年表』及び近世文学研究者小池藤五郎氏の記録によれば、明暦から延宝（一六五五～一六七四）にかけて、行成表紙本或いは赤小本の『鼠の嫁入』が生まれていたことになる。が、子ども等にこそいつくしまれたものだけに保存されることも珍しく、加えて戦禍に巻き込まれるなどしたため、今は所在不明である。従って、現存する最も古い『鼠の嫁入』は、国会図書館貴重資料室に大切に納められている、初期の赤本であろう。

丹砂の赤が黒ずんだ茱萸色になった、虫の跡も痛々しい扉。しかし内には、それらを眺めては夢をつむいだであろう、とおい昔の子ども等の声が聞こえてくるような、賑やかな鼠どもの世界がある。

『鼠の嫁入』といえば、今日、太陽、雲、風、壁、鼠とめぐる、鼠の婿捜しを想い浮かべる人が多いと思われる。が、赤本の『鼠の嫁入』は物語に従って展開するわけではなく、鼠の世界の婚礼前後の、賑やかな悦びに満ちた場面場面が綴られて一冊となっている。㈠そうじ㈡結納　㈢その接待　㈣化粧・着物の支度　㈤台所　㈥～㈩嫁入行列　㈪結婚式　㈫出産　㈬宮参り　の十三の場面がおさめられているのだ。そこには、主人公もいなければ、画面の中に焦点となるしるしもなく、物語の展開もなければ、もちろんヤマ場も用意されていない。門の外を掃く者、打水をする者、布を裁つ者、畳む者、御歯黒をつける者、髪を結う者、タコを洗う者、膳を運ぶ

者、等々、様々なかっこうの鼠たち。また、金銀、真綿、諸白等の結納の品々、魚、鳥、すりばち、かまど等の台所の材料や用具、そして鼠たちの行列が延々と運んでくる、嫁入道具のあれこれ……。場面場面に「嫁入」にちなんで、人（鼠）や物が様々に混在して描かれている。鼠たちの発することばも、会話として繋がっているものではなく、それぞれのしぐさに応じて、一人言のように付されている。

こうした特徴は、同じく赤本の『ねづみの縁組』（享保年間、西村重信画）に、そっくりあてはまる。さらに、青本・黒本・黄表紙の『鼠の嫁入』と比べてみるなら、その特徴はよりいっそう明らかになろう。これらやや大人向けに移った絵本では、嫁入支度や出産の場面がつづられていることに変わりはないが、白鼠の福五郎と初かという固有名詞が与えられていたり、詞書の中で状況の設定や物語の展開が語られていたりする。大人を意識したときには、自ずと描写される、これら場面の状況や流れが、赤本では問題とされず、ただひたすら、人や物やことばの賑わいの中に、「嫁入」のめでたさが表われている。赤本『鼠の嫁入』には、何がどう語

に、そっとおくられたにちがいない。

◆「鼠の里」への幻想

ところで、そのような宝箱の住み人が、狐でも狸でも、犬猫でも、人でもなく、なぜ「鼠」であったのか。次に人々が、「鼠の世界」に幻視したものに目を向けてみることにする。

鼠と人の関わりは古く、既に『古事記』にその足跡を見る。炎に囲まれた大国主命を穴の中に招き入れ、捜し求めていた鏑失をみつけてくる、あの鼠である。ここでは、鼠の穴が外敵から守られた安全な空間として機能し、また鼠は大切なものをもたらす存在として登場している。そして、『古事記』にあらわれた、この「鼠の世界」と「鼠」に関する特性は、民話・伝承・土俗的な信仰の類にも、色濃く伝えられていると思われる。

（『ねつみのえんくみ』西村重信画より）

られるかという「内容」ではなく、悦びあふれる幸福な「雰囲気」こそが描き出されている、といえようか。

女性の生における、祝祭に満ちた至福のひととき。そのありさまが、「鼠の世界」に託され、いたいけな女子の手の内に、祈りと悦びのこもった、小さな宝箱のよう

たとえば、ほとんど全国隅なく語り継がれてきた「鼠の浄土」は、餅つき（小判つきの場合もある）に興じる祝祭的な空間、天敵の猫から守られたウロ状の安全な空間、そして帰りには宝や富が授けられる空間、として「鼠の穴」を描き出す。また、「鼠の隠れ里」の伝承は、鼠の里の餅つきの音を耳にすると富み栄えるとか、そこを訪れると宝を与えられる、といい伝えている。さらに、大黒天の使いとなって、福や富を運びくる白鼠の話、鼠の居る家は富貴の相があるとするいい習わし、鼠に尊称を用い餅を供えて、その害の及ばぬこと、その年豊作であることを祈る風習等、鼠に霊力を信じたものも多い。

常日頃は、穀物を荒し、大事な米を盗み、柱や壁に穴をあける、厄介もの。しかし、人々は、人に飼い慣らされることのない力のかげに、穀物や米や、ひいてはそれらを糧として営まれる「家」を守る霊的な力をも重ね見たのであろう。また、富裕な家の米倉には鼠が棲みつく、という事実を裏返せば、鼠の居る家こそ富を約束された家である、という逆説もなりたとう。人々は、鼠が穀物や米や家を荒すが故に、それらを司る力を秘めた存在とみなしたのであ

い、大地のぬくもりのたちこめた空間、そこに賑やかにくり広げられる餅つき……、安全と暖かさと満ち足りた糧が、鼠たちの小さな世界にゆだねられたのだった。それは、決して輝かしい大きな夢ではありえない。けれども、日々のくらしに不安を抱きながらも、わずかなぬくもりと食糧を糧として生きる人々にとっては、この上なく暖かい幸せに満ちた夢の幻郷であったろう。

「鼠の世界」だけでなく、人々は、身近に住まう、この小さな生き物の動きにも、特別な気持を抱いていたと思われる。人の寝静まった夜中、走りまわるかすかな音を耳にし、壁の穴からのぞいたちいさな顔や、家の片すみに見え隠れする姿を目にしたとき、正体は鼠とわかっても、一瞬、そこに自分たちと不可視の世界とを繋ぐ精霊の姿をみた、としても不思議ではない。姿なくかすかに気配だけをおくってよこすもの、内と外をすばやく行き

（『ねつみのえんくみ』西村重信画より）

る。

そこには、「鼠の世界」をこそ、食に満ち足りた理想郷として想い描く気持があった。全国各地に伝わる「鼠の浄土・隠れ里」には、そうした人々の幻想と夢がこめられている。小さな入口によって外敵の侵入を許さな

来するもの、思わぬところから現われかき消えるものとして、鼠は、幸運をもたらす福の神の使者となり得たのである。

◆『鼠の嫁入』に託されたもの

長い年月育まれてきた、鼠及びその世界に付託されたイメージを垣間見るとき、絵本『鼠の嫁入』によせられた想いも、ひとしおの強さを持って迫ってくるように思う。

赤本の大きさは、赤小本よりやや大きいだけの、縦五寸四分横三寸九分五厘（16・6×13・1㎝）。そのわずかな空間に、できるかぎりの悦びと願いをこめるのに、人々の想像力は、長い歴史の中から自ずと「鼠の小世界」を選びとったのであろう。そこは、小さいながら、豊かで満ち足りた空間であったから。そして、この小動物は、小ささと活発さ故に、福をもたらす神の使いでもあったから。

さて、ここでさらに触れておきたいことがある。秋田、岩手、宮城、長野等、非常に多くの地域に、正月に限って、鼠を「オフク」とか「ヨメゴ」と呼び、餅を供えるという習わしがある。鼠が、実際はいたずらな厄介者であるにも関わらず、霊的な力を付与されてきたことは既に述べたが、その聖性を最も露わにするのが、「正月」という常ならぬ時なのであった。新しい時の光を浴びて、鼠は、一年間の「家」の安全と穀物の豊作を祈願される精霊へと変幻する。また、賑やかな餅つきがくり広げられる「鼠の里」も、新年の様相である。これらのことから「鼠の聖性や祝祭性」は、正月、すなわち一年のはじまりの時と切っても切れない縁があると思われる。

加えて、鼠算式に増えるというたとえにあるように、鼠は「多産」と結びついていた。先に紹介したように、『鼠の嫁入』は、最後に「出産」「宮参り」の場面を付している。「嫁入」で切れずにこの場面まで描いたところ、当時の人々の、鼠の多産傾向に付託した祈りを読みとることができるのではないだろうか。

昨年、本誌に連載された鬼頭氏の歴史人口学の考察によれば、当時、出産に伴う危険性は殊の外高く、また無事に生まれたにせよ、その子の誕生を悦び育てるだけの条件が用意されていた、とはいい難い。そんな状況にあって、子どもが無事に生まれ、育ち始めるということは、やはり「鼠」に託した、人々の切なるのぞみであったと思われる、子孫の繁栄を願う心と、この世に生を受けた子どもへの祈りが、この小本にこめられているのであろう。

一さつの絵本の中にも、人々が長い年月、くり返し想い描いてきた夢や、現実に対する願いが、あふれている。『鼠の嫁入』に私がみたのは、小動物に託された、明るくおおらかな夢であり願いであった。

ところで、この本が生まれてから、子どものための本は、年の初春、すなわち新年に、子ども等に手渡される習わしができたという。鼠が正月と結びつくことは既に述べたが、子ども等は、やはり新しい時を迎えて、その祝祭に満ちた小世界を贈られることになったのである。

年のはじめ、子ども等に授けられる、赤い表紙の愛らしい絵本。子どもの小さな手に、それにふさわしいほどに小さな「鼠の世界」をおくり届け、人々は何を想ったのだろう。鼠の里に幻郷をみたように、そしてまた鼠に精霊の姿をだぶらせたように、子ども等の世界に、そんなささやかな夢を見、願いを託したのではないだろうか。新年を祝い、一年の豊かな営みをこい願う人々にとって、子どもは、新しい時を活き活きと紡ぎだす、この上なく悦ばしいもの、とうつったのであろう。

二百年もの歳月を経て、今日に残された絵本が、子ども等によせられた暖かな想いを証し、そこにゆだねられた夢を語っているように思われてならないのだ。

*1　坂田金平を主人公とする講談本類の娯楽本。明暦から寛文（一六五五～一六七三）にかけて流行、挿絵入の半紙本で絵草子のきっかけといわれる。

*2　名書家藤原行成の著わした歌書にならい、丹砂の赤の表紙に雲母で紗綾形・亀甲・牡丹鶴等を型どった美しい本。